

# 子どもをニューエリートに育てる方法

新しい時代に活躍する  
ニューエリートを育てるには、  
どのような教育が必要か。  
独自の教育を実践してきた  
2人が大いに語る。

interview by Norihiko Sasaki  
text by Tomoko Tamura  
photo by Shunsei Takei

## 1つ突き抜ければ輝ける時代

——今、従来のエリートとは異なる「ニューエリート」が活躍し始めています。これから時代、どのような人がニューエリートになっていくと思われますか。

**高濱正伸** まず、ニューエリートのすべてがリーダーである必要はないんですよね。リーダーにならなかつたらもう終わり、というふうに思はなくていい。

これまで、いい中学、高校から東大に入って、大手企業に就職して……というエリートコースを目指すために、親たち、特に母親は、とにかくその道を外れないような教育をしてきました。

でも、これからは、何か1つ突き抜けて尖ったところがあれば、輝ける時代です。その尖ったところ、子どもが得意なことを、早いうちに見つけて伸ばしていくことを意識する必要があると思います。

**藤原和博** そう、そういう僕らや今の親世代が信じてきたエリートコースは、もう目指すべきところではないということは、はっきりしていますよね。

教育改革実践家

# 藤原和博

Kazuhiko Fujihara 1955年生まれ。78年東京大学経済学部卒業後、リクルート入社。東京営業統括部長、新規事業担当部長などを歴任。93年からヨーロッパ駐在、96年同社フェローに。2003年から5年間、都内では義務教育初の民間校長として杉並区立和田中学校の校長を務める。08年から11年橋下大阪府知事の特別顧問。16年から18年3月まで奈良市立一条高等学校校長。

花まる学習会 代表

# 高濱正伸

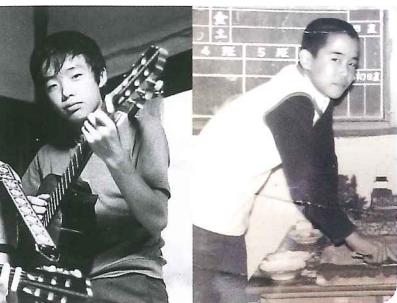
Masanobu Takahama 1959年熊本県生まれ。東京大学大学院農学系研究科修士課程修了。「メンが食える大人」の育成を目指し、93年花まる学習会を設立。95年には進学塾のスクールFCを設立。算数オリンピック委員会及び日本棋院理事を務める。障害児の学習指導や引きこもりの相談を受けるNPO法人「子育て応援隊むぎぐみ」を運営。教育や子育てに関する著書多数。

子どもたちよ  
ミリオンズ  
を目指せ

母親の  
意識改革が  
必要です

## The Future of Parenting

左は高校時代の藤原氏。「バンドのリードボーカルを務めたり、バスケットボール部に入ったりして高校生活を楽しみました。右は中学時代の高濱氏。「学校一の悪と一緒に文化祭の準備を徹夜でしていました」。



せてみて、ゴルフが最も向いているという見立てをして、徹底的に取り組んでいた。そういう見立てを、親ができるかどうかが重要になってくると思います。

### 目指すべきは“ミリオンズ”

——藤原さんは『100人に1人』のスキルを3つ掛け合わせて、『100万人に1人』の希少な存在になれ」という自説を唱えていますが、これからは、子どもの頃からそれを意識した方がいいということでしょうか。

**藤原** まさにそういうことです。100万人に1人の存在というのは、オリンピックでメダルを取るくらいの確率です。100万人のピラミッドの頂点に立つの、普通に考えたら難しいですよね。でも、どんな人でも、1つのことに1万時間投げれば、100人に1人の存在にはなるんです。それを3つの分野で成し遂げれば、その掛け合いで100万人に1人に匹敵する希少性を手に入れることができます。

僕はこの考え方を「3つのキャリアの大三角形」として繰り返し訴えてきました。最近は高濱さんをはじめ、堀江貴文君や西野亮廣君も賛同して広めてくれているんですけど、これからは100万人に1人の希少性を持つことを“ミリオンズ”と呼び、宗教のように布教していきたいと思っています(笑)。

**高濱** 藤原さんのこの大三角形の話は、とてもわかりやすいですよね。ミリオンズっていうのもいいですね。ただ、実際に子どもたちがミリオンズを目指していくには、親の意識を変えていかないといけない。それこそ、宗教改革くらい大変なことですよ。

**藤原** ずっと「みんな一緒に仲良く元気よく」できちゃっているから。今のような成熟社会になるまでは、それでもよかったんですよ。

情報処理的なことは  
これからAIが担っていくようになる——藤原



みんなと一緒に知識や技能を身につけて、いち早く正解を導き出す情報処理力を高める教育を行うことで、成長期の日本は「上質な普通」の社会をつくり上げてきたのですから。時速300kmで走る新幹線の運行を分単位で管理できたり、レストランで同行者が別々のメニューを頼んでもほぼ同じタイミングで提供されたりするのは、日本くらいのものですよ。そのベースとなった教育を否定するつもりはないんです。

しかし、そういう情報処理的なことは、これからAIが担っていくようになります。世界的ベストセラー『サピエンス全史』の著者、ユヴァル・ノア・ハラリは、『ホモ・デウス』では現代のネットワーク社会とAIや生物工学の技術の融合が進めば、人間が機械化していく、やがては人間の意味が消えると予言しています。ただ、そうなったとしても、機械に意識が宿ることはない。意識があるかどうかが、機械と人間の違いになるということは、彼は指摘しているんですね。

じゃあ、どんな意識で生きていくべきかというと、先ほどの希少性を見いだすということなんですよ。「みんな一緒に仲良く元気よく」の方に向かってしまうと、その子の価値が失われていきますから。

**高濱** でも、母親の多くはそこが苦手なんですよ。3つのキャリアの大三角形の話や、ミリオンズとして活躍している人の話をすると、「なるほど」「すごいですね」など言つてはくれるもの、実際には「うちの子どもは普通でいいです」と思っている。その「普通」というのは、やっぱり東大に入るみたいなことで、旧態依然としているんですね。

#### 10歳までに「人間力」を育む方法

——母親はなぜ、それほどまでに「普通」から外れることを恐れるのでしょうか。

**高濱** 群れることで、安心できるからだと思いますね。つい最近聞いた話で驚いたのは、中学受験のための全国統一小学生テストなどを実施している大手進学塾では、

小学校入学前の年長生から、偏差値がわかるテストを始めたそうなんですよ。それはおそらく、母親の「今、目に見える結果を知りたい」というニーズがあるからで、それだけ外れないための指標を求める人が多いということの表れだと思います。

ですから、ニューエリートを育てるには、ミリオンズを広めていくのと同時に、母親の意識改革も必要なんです。そして、そのためには、父親が広い視野を持たせてあげることが大事だと思います。

——父親は、「外れたくない民族」の母親の対抗勢力になってあげるということですね。ただ、尖った生き方をしてこなった父親が、子どもに対して「外れてもいい」ということを言えるでしょうか。

**藤原** 実際に言えるかどうかは別として、少なくとも企業に勤めている父親なら、社会の現実を知っていますよね。東大を出でてもリーダーシップを発揮できない人がいたり、さりげない気遣いのできる人が職場の評価が高かったり。知識一辺倒では人を惹きつけることはできないということはわかっているわけですから、それを伝えることはできるはずです。

**高濱** いわゆる「人間力」ですよね。思考

力や判断力、表現力といった生きる力を育むには、子どもが10歳になるまでの働きかけが重要です。この時期の子どもは母親の影響力が大きいので、過干渉にならないようにした方がいい。でも、母親にとってそれは難しいことなので、父親が大局的な視点を持ってほしいと思います。

例えば、外遊びをたくさんさせるとか、サマースクールやキャンプに参加させるとか。花まる学習会でも、野外での体験学習を実施していますけど、親元を離れて、親以外の大人や子どもたちと自然の中で過ごす間には、五感が刺激されたり、時にはトラブルに遭遇したり、ケンカが起つたりもします。そうしたときに、問題を解決したり、コミュニケーションの方法を考えたりするなどたくさんのことが学べるんです。実際、親御さんたちに話を聞くと、子どもが野外体験から帰ってくると、成長したのを実感できるという声が多く聞かれますね。

**藤原** 僕も、10歳まではしっかり遊ばせた方がいいと思いますね。そして、世代や立場を超えた人間関係にもまれることも大事です。僕はそれを「ナナメの関係」と呼んでいます。昔はそのナナメの関係が、地域社会にあったんですよ。学校の先生や

父親たちが得意なことを持ち回りで企画して  
子どもたちにいろいろな体験をさせるのもいい——高濱

母親に叱られて、家に帰りたくないというようなときには、近所のおばさんやおじさんが声をかけてくれたり、家に上げてくれたりして。それから、僕は当時には珍しく一人っ子だったんですけど、友達にはほとんど、きょうだいがいたんですね。その兄ちゃんやお姉ちゃんたちと一緒に遊んでもらうために、愛想を良くするとか戦略を立てたりとして(笑)。そういうところで、自分で考えて、みんなが納得できる解を見いだしていく「情報編集力」が鍛えられていたんです。

家を建てるときには、柱と柱の間に筋交いを斜めに渡して、補強しますよね。ナナメの関係はまさにその筋交いのようなもの。家庭や学校で何かあったときでも、ナナメの関係があれば、子どもの支えとなってくれます。地域社会が衰退して、ナナメの関係を持ちづらくなった今は、サマースクールやキャンプを活用するのも有効だと思います。

**高濱** 学習塾が主催するようなサマースクールやキャンプじゃなくてもいいんですよ。お父さん同士が集まって企画するキャンプもお勧めです。

**藤原** 僕はアウトドア派ではないので、正直なところ、キャンプは嫌いなんですよ(笑)。それでも、3人の子どもたちには経験させたかったから、アウトドアが得意なお父さんと一緒に行っていましたね。そうすると、雪の積もる湖畔でのキャンプとか、自分では絶対に思いつかないような体験ができる、子どもたちも喜んで。そういう意味では、親にとっても、いろんな得意分野のある人とナナメの関係を持つておくことは大切だと思います。

**高濱** それはいいアイデアですね。父親たちが得意なことを持ち回りで企画して、いろいろな体験をさせるなんていうのもいいかもしれない。

#### 夫は妻の笑顔と幸せを3回唱えろ

——父親の役割として、ほかにも意識しておくといいことはありますか。

**高濱** 母親がいつも笑顔でいられるようにすることですね。子育ての中心的な役割を果たすのは母親です。これは社会制度や共働きかどうかといったこととは関係なく、生物学的な観点からの見解です。自分のお腹を痛めて子どもを産む母親と、そうでない父親とでは、母親の方が偉大な存在だと考えるのは自然なことですよね。ですから、その母親、つまり、自分の妻がいつ

もニコニコ笑っていられるように尽くすのが、父親、夫の大切な役割だと思います。家事が得意なら分担する、聞き上手なら妻の愚痴や不安にとことん付き合う。ただ、苦手な人がそれをやると、家事をやってうまくできなくて逆にイライラさせてしまったり、良かれと思ってアドバイスが怒りを買ったりと、逆効果になることもあります。

家事も話を聞くのも苦手という男性は、自分の妻が喜ぶことを考えてみるといいでしょう。例えば、アイドルが好きならライブに行かせてあげたり、ママ友とのおしゃべりがストレス発散になるならその時間を多くつくってあげたり。働くことが好きなら、仕事やボランティアを勧めたり。そういう、妻の笑顔に効く「ニコニコカード」を用意しておいて実行する。妻自身が自分でニコニコカードを使っていくのもいいと思いますね。

それから、先ほどのキャンプもそうですが、子どもとたくさん遊ぶことも、父親の役割であり、妻の笑顔につながります。究極的には「妻が笑顔で、幸せでありますように」と毎朝3回唱え続ける(笑)。これはもう理屈じゃなくて、想いで尽くすんですよ。

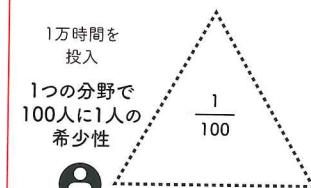
**藤原** 想いで尽くすか、なるほどね。確かにそういう想いがあると、「ありがとう」とか「お疲れさま」なんて言葉が自然に出てくるようになるかもしれないね。

**高濱** そうなんです。そうやって母親がいつも笑顔でいられて、精神的に安定していると、子どもの自己肯定感を高めるんですよね。子どもが「お母さんはいつもうれしそうに見てくれているな」と思えると、子どもも自分を受け入れてもら正在し、自信が持てるようになります。

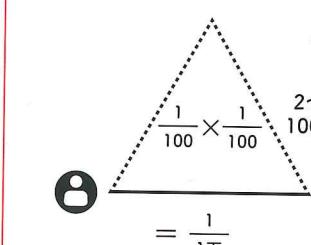
一方、母親が不安定でいると、子どもに對しても心配になって、あれこれ口や手を出してしまいます。例えば、子どものやる気や主体性を育てるには、本人が自分で「やりたい」と思って好きになることが大切です。それを、「みんながやっているから、これをやらせないと」など思ってしまう。それでも、

#### 「100万人に1人」の存在になる方法

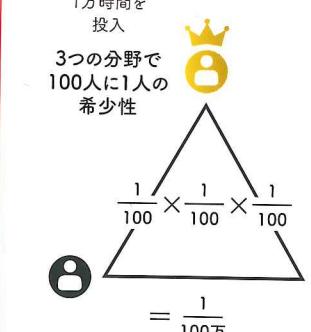
##### STEP 1



##### STEP 2



##### STEP 3



中学受験戦争の呪縛を解くために留学を勧める  
母親の世界観から離れて、自分の世界観を編集していく——藤原

最初は興味を示して、子どもなりに楽しむものです。そこに、母親が「もっとちゃんとやりなさい」「一緒に始めたのに、あの子の方が上手ね」といった言葉をかけてしまうと、それ自体を嫌いになってしまいます。

**藤原** 子どもが何かに夢中になっているときは、親が口を出して邪魔しない方がいいよね。そうすると、集中力が高まる。

**高濱** 集中力を磨くことも大切ですね。どんなに時代や環境が変わっても、自分でやり抜くには集中力が必要ですから。

**藤原** 今、ニューエリートの代表とされる落合陽一君や、SHOWROOM社長の前田裕二君、それに先ほども名前を挙げた堀江貴文君や西野亮廣君といった人たちに話を聞いていくと、共通して見えてくることがあるんですよ。それが、尋常じゃないほどの集中力なんです。彼らには何か問題が起こったり、失敗したりしたとしても、それを問題とも失敗とも思わず、何度も軌道修正しながら突き進んでいく集中力があるんですよね。その集中力は、子どもの頃の遊びや学びの中で磨かれているということも、共通しています。

さらに彼らには「根拠のない自信」というのがベースにあって、それはおそらく、10歳くらいまでの幼少期に、母親などから圧倒的に愛された、認められた経験があるんじゃないかなと思います。だから、母親がいつも安定して、子どもを見守ることはすごく大事ですよね。

——子どもの主体性ややる気が大切というお話がありましたら、中学受験が視野に入ってくると、どうしてもその基準に縛られてしまうところがあります。

**高濱** そこは難しいんですけど、やっぱりバランスが大事だと思いますね。受験は親も子も真剣勝負で臨みますから、知識が増えたり、その習得の仕方が身についたり、鍛えられる部分もたくさんあります。ただ、それだけに偏らず、先ほども話したような野外活動やいろいろな人間関係の中でもま



れる経験もさせてあげる。その両輪で回していくことを意識しておくといいと思います。

**藤原** 確かに、首都圏の中学受験についてはちょっと行きすぎている感がありますね。でも、高校や大学受験は経験しておくといいと思います。もうこれ以上勉強したら倒れるというくらい、集中して学ぶことはしておいた方がいい。自分はどこまで覚えられるか、それをパソコンのメモリーがどこまで増やせるかみたいな感じで、ゲームとして捉えてやってみると、脳のキャパシティや知識の量が広がります。

僕が、頭がいい、教養があると感じる人は、みんな圧倒的な知識がある。それに、本を相当読んでいます。彼らは知識を身につける過程で情報処理力が鍛えられているから、仕事も速いし、よくできる。その分、プレゼントーションでどう見せるか、どんな演出をしたら効果的かといった情報編集力の方にアタマを使えるんです。そのどちらもあることが大事で、センスだけで勝負しようとしても通用しないんですね。

**母親と息子の共依存を脱却するには**

**高濱** そう、ナレッジやスキルの部分を鍛えることにも意味があるんですね。最近はわからないことがあればパソコンやスマートで調べればいい、覚える必要はないみたいなことがいわれますけど、それでも知識はあった方がいいんですよ。例えば、相対性理論について調べるときに、物理の知識がなかったら、理解できないですね。

ただ、その知識一辺倒では、社会に出たときに必要な人間力は育たないので、自然や人間関係の中で学ぶ機会もついていく、ということですね。

**藤原** 過熱する中学受験戦争の呪縛を解く、情報編集力を鍛えるという意味では、僕は留学を勧めたいですね。小学校のうちなら

キャンプよりも期間が長い山村留学とか、高校から海外に留学させるのもいいと思います。

**高濱** 確かに留学はいいですね。中学受験で問題なのは、親にビジョンがないまま流されてしまうことなんですね。目指すものがあって、そのためにはこの学校で学ばせたいとか、そういう目的があって受験に臨んでいる人はすごく少ない。特に首都圏の母親は、競って偏差値の高い学校に入れようとする傾向があるので、父親が留学という道があることを示してあげると、その集団催眠みたいな状態から目覚められるかもしれない。

**藤原** 思春期を迎えるくらいまでの子どもは、母親の世界観の中で生きてきているから、留学でそこから離れて、自分の世界観を編集していくことをやった方がいいんですよ。

それもできれば、大学からなら2年以上。1年くらいだとお客様のように過ごして、労なく帰ってくることが多いから。2年いると、いろんなトラブルが起ります。寮で財布を盗まれたり、ルームメイトがイスラム教徒で明け方から礼拝を始めてしまつて寝られないとかね(笑)。その度に、自分で解決したり、交渉したりしないといけないわけですから、情報編集力が相当鍛えられますよ。

#### 母親と息子の共依存を脱却するには

**高濱** 思春期に母親の世界観から抜けられるかどうかは、その後の成長にも関わってきますね。男の子は特に、母親がその時期に子離れできていないと、将来的にいわゆる引きこもりになるリスクが高いというデータもあります。また、有名男子中学校に進学した子どもの中には、中学生になってからも母親と一緒にお風呂に入っているという人が意外と多いんですね。

**藤原** それは共依存といって、母親も息子もお互いに依存し合ってしまうんですね。母親にとって息子というのは、いわば自分が愛した人の若い頃の分身で、そこに自分の要素も含まれているわけだから、これ以

母親だけに教育を任せておくと  
傷がつかないように守ろうとして、子離れできなくなる——高濱



上の愛情の対象はないんですよ。

**高濱** 今は特に、一人息子の場合も多くなっていますから、母親だけに教育を任せおくと、とにかく安全で傷がつかないよう守ろうとしてしまって、ますます子離れできなくなる。うまく距離を取つてあげるという意味でも、留学はいいと思いますね。

——女の子の場合はいかがでしょう。最近は大人になっても、友だちのように一緒に買い物に出かけるような母と娘も多いですよね。この場合も、共依存の関係なのでしょうか。

**高濱** 女の子の場合は、思春期を過ぎて、母と娘という関係から大人同士の関係になつて付き合えるのは、逆にいいことなんですね。親子の関係があまりうまくいっていない場合、その母親自身が自分の母親との関係に問題を抱えているケースが多いんです。母と娘の関係もまた難しくて、一度こじれてしまうと修復するのが難しい。ですので、そこがうまくいっているのであれば、それはそれでいいと思います。男の子の場合は、早く母親と離れて、彼女をつくった方がいいです。

#### 新しいムーブメントを創る

——最後に、親の意識、特に母親の安定志

向を希少性の方へ向けるには、どのようにしていけばいいでしょうか。

**藤原** それはやっぱり、希少性で勝負しているミリオンズのロールモデルをたくさん見ていくことじゃないですか。今は子どもを産んで専業主婦になった人でも、ミリオンズになれる可能性は大いにありますし、そういう道を示してあげると、子どもに対しても選択肢が広がりますよね。

**高濱** 専業主婦や育児休暇中の女性は、キャリアの視点で見るとどうしても、ネガティブな印象を持ちがちですよね。でも、子育て中には、たくさんのチャンスの芽があるんですよ。

例え、もともとは職人向けの衣料品専門店だったワークマンが、女性の人気を集めようになったのは、子育て中の主婦が発信した情報が火付け役となったんですよ。飲食店の厨房用のシューズは滑りにくいということで、雨の日に子どもを抱いて出かけるときでも安心だとブログで紹介したところ、小さな子どもを持つ母親や妊娠から反響があり、商品がよく売れた。さらに、そこからヒントを得たワークマンが、デザインなどを改良したマタニティ用のシューズを発売したんです。

**藤原** それは主婦や子育ての経験も、立派なキャリアの大三角形の1つになり得るという好例ですよね。

ほかにも、企業で広報を担当していて、結婚して母親になって、子どもが習い始めたバレエの衣装を作りするようになって、それをネットで販売するようになった女性を知っています。そういうロールモデルをたくさん見つけて、NewsPicksでどんどん紹介していくべきいいんですよ。

**高濱** 確かに、安心できる指標を求めがちな母親族は、ムーブメントに乗りやすいところがありますから、NewsPicksがそれを創っていくというのはアリですね。

——なるほど。ただ、NewsPicksの読者は男性が多いんです。

**高濱** そこは「さよなら、おっさん。」のキャンペーンを打ったように、まずは男性の意識から変えていって、父親から母親へと波及させていくべきいいんですよ。

**藤原** 僕たちはすでに、未来のミリオンズやニューエリートを発見できるツールも手にしていますよね。象徴的な例として思い浮かぶのは、ネットを通じて「PPAP」で世界を席巻したピコ太郎。あれは古坂さんの緻密な計算があったとはいえ、どんどん拡散されていて、ついにはジャスティン・ Bieberにまで届いて、爆発的にブレイクしましたよね。そして、年末のNHK紅白歌合戦出場まで果たしてしまった。

要するに、グローバルなネットワーク社会では、誰もが世に出るチャンスを手にすることができるということなんですよ。もしもしたら、子どものダンスや変顔をYouTubeに投稿したことがきっかけで、ハリウッドからスカウトが舞い込むかもしれない。

そういうことも実際に起こり得る時代に、偏差値偏重でみんな一緒の方向に行くのは、やっぱり違うんじゃないの?っていうことも含めて、NewsPicksにはどんどん情報を発信して、教育においてもムーブメントを創っていってほしいですね。